

知事記者会見（平成24年3月26日）

●知事発表

（1）平成24年度定期人事異動について

●幹事社質問

（1）大仙市の災害廃棄物の試験焼却開始に関する所感について

（2）今年度を振り返って

時間：13：59～14：23

場所：プレゼン室

（幹事社）

知事から発表事項があるということですので、まず発表事項からお願いいたします。

（知 事）

4月1日付けの人事異動の概要について申し上げます。

今回の異動の総数は1,559名、昨年度の1,463名と比較して96名の増でございます。そのうち課長級以上の異動数は、部長級が12名、次長級38名、課長級132名の182名であり、昨年度の164名と比較して18名の増であります。

年度末の退職者ですが、課長級以上の退職者は、部長級が7名、次長級19名、課長級33名の計59名、課長級未満の退職者数は97名、合計で156名が退職となり、昨年度の189名と比較して33名の減となります。

今回の異動の主眼点ですが、まず、新たに設置した観光文化スポーツ部には、交流人口の増加により、県内経済を活性化させる施策を着実に推進するため、重点的に職員を配置しております。

その他重要課題や特定課題に対応するため、技術統括監、戦略統括監、地域交通対策監、被災地復興支援監など新たな職を置き体制の強化を図ることとし、さらに財政課政策監などには若手職員を抜擢しまして、組織の活性化も図ることとしております。

主な異動内容ですが、総務部長には木村総務部次長、企画振興部長には柴田産業労働部長、農林水産部長には藤井農林水部次長、産業労働部長には関根産業労働部次長を充てており、生活環境部長に山田教育次長が昇任で異動しております。

詳細については、後ほど人事課にお聞きください。

私の方からは以上でございます。

（幹事社）

幹事社から一つ質問させていただきます。

観光文化スポーツ部に重点的に職員を配置したとありますが、これまでの総数よりも例えば何人増えたとか具体的に説明いただきたいのと、(新部長について) 民間からの登用ということで一部報道で、ある方に方針を固めたということもありましたが、そのあたりはいつ正式決定されるか教えてください。

(知 事)

現状の人数については後ほどお知らせしますが、新たな部には113名の職員を配置することとしております。

各部局においても継続的な大きな課題、対応があり、一つはその継続性を持ちながらもフレッシュで新しい感覚もということで、特に観光文化スポーツ部は、今までの継続性というものを持ちながら、かつ、観光文化スポーツというのは内部ですっと座って仕事する分野でもございませんし、かなり走りながら考える、あるいは俗に言う腰が軽くなければならないという点を踏まえ、単なる今までの仕事の経験だけではなく、特に民間部門と一緒にやらなければならない部分もございますので、そういう意味で新しいタイプの職員だとか、今までにない流れの職員を配置しております。

民間関係の方(観光文化スポーツ部長)についても、一部マスコミで出ていますが、29日の人事委員会で正式決定をさせていただきます。

手続き等は23日の議会終了後から具体的にスタートしており、着実にやっていきたいと思っております。

(幹事社)

それでは、各社さん、質問ございましたらお願いいたします。

(記 者)

この人事異動に関して2点ばかりお尋ねいたします。

まず1点目は、観光文化スポーツ部の部長に民間人を起用するという知事のねらい、理由をお聞かせください。

(知 事)

県として、これから交流人口を拡大し、産業構造の変革の中で、秋田県の持てる現在の力、あるいは有形無形の様々な資源を活用して経済行為に結びつけるとなると、円高の中で大企業の誘致もやっていますがなかなか難しい面もあります。

また、団塊の世代の人達が退職をすると、旅行をしたいというのが非常に多く、東アジアとの交流についても、観光という面で非常に大きな要素がございますので、観光という分野を秋田の活性化に結びつけていくため、これを重点化していきます。

もう一つは、スポーツ立県宣言、あるいは文化ルネッサンス宣言を行っておりますが、様々な形で県民生活の充実、体力の向上、地域の誇り、そういうものを高めることによって、県民の皆さんが前向きに生きる力になります。

そういうことからすると、この文化スポーツと観光の分野は、非常に大きい連携が必要ということで、この3つを一緒にして進めようとしています。

人事については、基本的には、ある程度これまで経験をした職員のほかに、非常に腰の軽く、動きの速い職員を配置しておりますが、これを統括するとなると、様々な視点から広い視野を持ったリーダーシップが必要です。

これには、経験に裏打ちされている部分と、様々な情報を握っている部分が必要ですが、県の職員でそういうものを持っている職員というのはなかなか難しいことから、民間人という発想になったわけであり、その発想の中で、観光業だけを対象とするのではなく、文化スポーツのイベント等を観光と結びつけて集客を図っていくことをやってきた方で、ある程度役所の仕組みも分かっている方ということで、候補者を最終的に絞ってきたということでございます。

当面役所のやり方と、民間のやり方を融合し、広い視野から秋田の観光行政をリードして、また個別具体的な出来事に対しても経験のある方ということで、通常であれば3月の初めぐらいまでの選定ですが、ぎりぎりまで最終的な交渉が続いたというところでございます。

(記 者)

もう一点、2012年度というのを自分自身の総仕上げの年と知事説明でおっしゃっていましたが、その総仕上げの年というのを意識しまして、今回の人事異動で配慮された点等はございますでしょうか。

(知 事)

全体として限られた人的資源ですので、重要な施策の継続性と、その組織として単なる経験だけではなく、全くその仕事そのものは初めてけれども、様々な形で能力、例えば、非常に交渉能力や行動力があるだとかという点も加味し、いろいろな面で私なりに考えた人事であります。

(幹事社)

幹事社から質問事項2つお願いいたします。

1つ目が、本日から岩手県の災害廃棄物を搬入し、大仙市で試験焼却の実験が開始されました。今年度、その災害廃棄物の受け入れを最大の目標とされてきて、ようやく始まったことに対する所感。

2つ目が、今年度最後の記者会見ということですので、今年度を振り返ってどう総括されるか、また、来年度に向けての抱負なども教えてください。

(知 事)

まず、がれきの試験焼却が今日から始まり、4月の中旬にはデータが出揃うと思います。

やはり、この試験焼却による数値をきちんと掌握した上で、県民の皆さんにこれをお知らせするというのが一番大切であり、我々としては予見を持たずに、まず数字を待つということでもあります。

これまでの学問的なデータ分析からすると、特別な数字は出ないと思いますが、あくまで試験焼却の数字を見た上で、県としても大仙市さんとしても最終判断を行うことだと思

います。

もう一つは、今全県的に一部説明会が開かれたところもございますし、これから4月以降、説明会があちこちで開かれる予定で進んでいるということで、ほぼ全県の市町村でこの問題について取り上げていただいておりますので、この結果の数字がはっきりしますと、これから行う市町村の説明会でも説得力が出てくると思います。

全国的にこの流れが急に一気に出てきたわけですが、私は常にその流れというものに余り乗らないというか、常に流れに対しての疑問を感じるという性格上、心情的な問題でこれを処理するものではなく、科学的な見地の問題だということで、やはりこういうデータを積み重ねた上できちんと安全性を担保してやるというのが普通であります。

被災地のがれきを処理しなければなかなか前に進まないということで、それを最大限協力することは一方では大切ですが、批判がなければ抜ける可能性があり、御批判があつて初めて、念には念を入れるということもありますから、(処理が)遅れているからやる気がないとか、早いからいいとかという問題ではなく、あくまでも粛々と冷静に進めていきたいと思います。

それと、23年度の思いと24年度についてですが、23年度は大震災の影響が甚だ大きな形で我々にも降りかかってきたわけであり、また欧州の問題から端を発した経済危機、円高等、日本にとっても秋田にとっても大変揺れた年であり、何とか乗り切ったというか、24年度につなげたということでもあります。

まだ全国でワーストですが、自殺率がある程度下がり始めたという傾向は、今までの民間の皆さんも含めた大きな一つの力であり、また、エネルギー問題については来年度に向けてかなり自然エネルギーの活用に踏み込んだつもりですので、これは一つの大きな流れであります。

さらに、24、25年度、その先にもつながりますが、デスティネーションキャンペーンの決定や国民文化祭の決定があり、大変厳しい状況の中で、秋田の様々な形での活性化につながるきっかけや機会を幾つか設定したということもございます。

そういうことで、この23年度は、どちらかという大震災に追われ緊急的な事態での行政運営が中心でしたが、こういう大きなイベントがこれから重なり、また中通一丁目地区の再開発も24年度には姿を現します。また、県の木材産業のリーダーとなるべく大規模製材工場も24年度には操業が開始されます。

秋田県全体を前に進めるためのイメージアップにもつながり、観光文化スポーツ部の存在意義にもつながる秋田を舞台にした全国的なイベントと、今度はその市街地再開発や大型製材工場という基盤的な下地も整い、ある意味では24年度がちょうどその岐路にかかる年であり、ハードで大きなものをつくるのではなく、ものの考え方、これからの進め方について24年度は相当きっちりやり、間違いのない方向性を定めなければならないという総仕上げの年であります。

そこがうまくいきますとその先が見えてくるわけであり、そういう意味では24年度で終わりということではなく、一定のステップを踏んで、それが目に見える形で表に出ますので、それを25年度以降につなげていくという大変大事な年であろうと思います。

(幹事社)

ありがとうございました。

(知 事)

どうもありがとうございました。